

・愛そのもののイエス

イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」(ルカによる福音書一九章一節～一〇節)

有名なザアカイの改心物語です。この物語は、ルカによる福音書にしかありませんから、ルカ独自の史料に基づくものと思われます。著者ルカは、伝統的には、「医者」であったルカ(コロサイの信徒への手紙四章一四節)、またはパウロの「同行者」ルカ(フィレモンへの手紙二四節)とされてきましたが、近代の聖書学では、この福音書の語彙、思想からは、とてもパウロの影響を強く受けているとは思えないので、他の三つの福音書と同様に、無名の人物とされています。いずれにしてもこのルカは、異邦人(ユダヤ教徒ではない外国人)でありながらユダヤ教に同調する、いわゆる「神を畏れる者たち、」(使徒言行録一三章一六節。二六節)または「神をあがめる者たち」(使徒言行録一六章一四節、一七章四節、一八章七節)で、キリスト教に改宗した人と考えられます。

この福音書の特徴の一つに「失われた者を」捜し求めるイエス像があります(一五章)。そして当時、差別されていた婦人、病人、徴税人へのイエスの愛が、よく描かれています。このザアカイ物語は、その典型です。当時の徴税人というのは、ローマの政府から一地方の税金徴収権を買い取った請負人で、政府との契約以上に徴税し私服を肥やしていましたから、ユダヤ人からは、売国奴、裏切り者、悪徳人、罪人として嫌われ、蔑視されていました。改心したザアカイが「何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と言っているところから見ても、二倍の徴税をしていた可能性があります。

そのザアカイが、イエスを見たいという気になったのは、イエスの弟子に徴税人だったマタイがいたからでしょうか？イエスの評判を聞いて、どんな顔をした人か見たくなかったのでしょうか。たぶん、最初は、ほんの好奇心だったろうと思います。しかし、彼がムキいになってしまうことが起こります。

「背が低かったために、群衆に遮られて見るができなかった。」(三節)

背が低いのですから、前に出してあげても誰にも邪魔にはならないはず。しかし、ザアカ

イは嫌われていました。こんな時とばかり、群衆の一人、一人が彼の進入を妨げました。こうなると、最初の好奇心は、どこかに飛んで行ってしまいます。こうなると、何が何でも見たくなるのが人情です。「群衆に遮られ」たことで彼の運命が大きく転換されることになりました。

人生というのは、何が幸いするか分かりません。「群衆に遮られ」ることなく見ることができていたら、「ハーン、ああいう顔か」くらいで終わっていたかも知れません。しかし、ザアカイは、今や意地の人になっていました。そこで、恥も外聞も捨てることはお手のものだったザアカイは、人々の嘲笑を尻目に、誰はばかることなく見ることのできる木に登ったのです。町一番嫌われていた彼が、木に登ったのですから、人々は指差し、あざ笑ったことでしょう。しかし、ザアカイは必死にイエスの顔を見ようとしました。「そこを通り過ぎようとしておられたからである。」(四節) どんな顔かを見定めようとする、ちょうどイエスと目が合ってしまった。

イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」(五節)

この一言で、ザアカイは改心します。ふしぎです。イエスから聖書の話聞いたとも、イエスに熱い抱擁をされたとも書いてはいません。この一言の重みを考えてみましょう。そこで、私がイエスだったら、どう言ったかを想像してみますと、たぶん、

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。」

までは、同じだろうと思います。初対面でも、人々が名前を呼んでいたから、私でも彼がザアカイという名だということくらいは分かります。そして、人々に嘲笑されているザアカイを黙って見ているには忍びません。そんなにしてまで、自分の顔を見たいという人をいとおしく思わない人はいないでしょう。でも、その後が違います。私なら、

「そんなに私の顔を見たければ、集会が終わったら、あなたのところへ行くよ。そこで、ゆっくり私の顔を見なさい。何かうまいものでも用意して待ってて！」

と言っているでしょう。しかし、これで改心は起こりません。恩着せがましいからです。そうすれば、ザアカイは思うでしょう。

「なあーんだ、大した奴じゃないじゃないか。これまで会った奴と一緒に、要するに金が欲しいんだな。」

「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

とイエスが言った途端、

これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところへ行って宿をとった。」(七節)

と書いてあります。もしも私があ現場にいたら、やっぱり同じように言っただろうと思います。もっと激しい勢いで、いきまいていたかもしれません。

「なんだよ。イエスは貧しい者や、病人の友じゃなかったのか！ここにもっとイエスに会いたい、癒してほしいと思っている者がこんなにいるのに、それを放っておいて、この町で一番先に地獄に落ちて欲しい奴のところから自分から泊まらしてくれて頼むなんて。ああ、いやだ、いやだ、やっぱりイエスも金とご馳走に弱い普通の人間だった。それなのに、神の子ぶるなんてけしからん！」

あの一言で、イエスは、エリコには二度と行けないことになったと思うのです。ひょっとすると、後のイエスの裁判の時に、群衆が「十字架につける！」と叫んだようですが、その中にエリコから駆け付けて来た人もいたのではないか、と思うのです。私があのようにしか言うことができなかつたのは、周囲の人々の反応を気にしているからです。

しかし、イエスは、木に登ったザアカイと目が合った瞬間、周囲の人々が消えてしまいます。「カナン」のところで申し上げたように、イエスは、感じたまま正直に生きられた方です。ユダヤ人のことで頭がいっぱいだったら、そのことから離れなかつた。私なら、「営業用スマイル」をしているところを「何もお答えにならなかつた」（マタイによる福音書一五章二三節）方です。ザアカイを一心に見つめられた。そして、「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」（どうもこの訳は、私のイメージに合いません。こんな偉そうな言い方ではなかつたような気がするのですが）と言ってしまいます。イエスのこの言葉は、「感じたまま」出されたものです。

誰でも経験があると思いますが、何年ぶりに会った人から、あの時に、こう言われて、すごく助かったよ、なんて言われて、自分には覚えがない。「へえーっ、そんな気のきいたことを言ったの？」ということ。これです。人は、恩着せがましい言葉や、行動からは決して感動しません。せいぜい、「困ったなあ、どうお礼したらいいかな？」くらいにしか思いませんから、すぐ忘れ去られてしまいます。そして、私が忘れた言葉が、人に感動を与えたのは、自然に、その人の立場に共感していたからだと思います。

でも「感じたまま」に言ったり、行動したりするには、勇気が必要です。人の反応ばかり気にしては、ほんとうに人の心に届く言葉や行動は生まれません。イエスは、十字架の死を予告してペトロがいさめたとき、

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マタイによる福音書一六章二四節）

と言われました。「自分を捨て」というのは、単に、「自我を捨てる」とか、「自意識過剰にならないで」というような意味よりも、もっと単純に「我を忘れて」という意味じゃないか、と思います。あるいは、「体当たりで」と言ってもいいかもしれません。

以前、ニュースで見たのですが、刃物をふりかざして人に襲いかかろうとした強盗に飛びついて逮捕を助けた人が警察に表彰されて、インタビューを受けていました。

「飛びかかる時、恐ろしいとは、思わなかつたのですか？」

「いいえ、その時は夢中でしたから。」

そうなのです。危ないなんて考えず、これは、たいへんと感じたまま、彼は飛びついたのです。ですから、まかり間違えば、刺される、ということもあり得ます。やはり命がけです。でも、その青年は、「危ないっ、感じたまま」気がついたら、その男に飛び掛かっていた、というのが、ほんとうのところだと思います。イエスの「自分を捨て、」ということは、「体当たりしろ」、ということだつたのではないか、と思うのです。だから、ザアカイには、非常に迫力があつた一言となつたのだと思います。

そして、「自分の十字架を背負って」とうことは、昔、毛利と戦つた尼子の家臣、山中鹿乃助が

「我に七難八苦」を与えたまえと祈った、と言われますが、単に苦難を背負うということだけではなく、非難と誤解を背負え、ということの意味していたのではないのでしょうか？「感じたまま」に言ったり、行動すれば、誤解されたり、非難されることもあります。だから、「感じたまま」の愛は、人の誤解と非難をも受容する覚悟がなければ、出来ません。イエスは、その覚悟を勧めておられるのでしょう。ザアカイに対するイエスの言葉は、エリコ中の人々の誤解と非難を覚悟されたものだから、彼には、非常に迫力があつたのです。それほどにしてまで、自分の友となろうとしてくださる、これは、もう何も要らなくなるほどの感動と喜びをもたらします。だから、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」(八節)

と言ってしまいます。これほどの愛を受けたから、彼も他人に対する愛に目覚めました。ほんとうに愛されて、初めて、人を愛することが始まります。他者に対して、肩をいからして、自分の心を閉ざして、唯一の宝、お金に執着する必要がなくなるほど、自由になったのです。ザアカイは、「金持ち」(二節)でしたが、ほんとうは、とても貧しかったのです。そして、今や、ほんとうに豊かな人に変えられました。だから、イエスもとてもお喜びになります。

「今日、救いがこの家を訪れた。」(九節)

ザアカイが救われた、自由になったことは、彼だけではなく、彼の家にも救い、自由をもたらしたのです。

愛とは「してあげること」ではなく、「してもらうこと」なのです。「してあげること」は、自分に点数をつけ、相手に「ありがとう」を言わせます。「ありがとう」がないと、結果はすべて相手のせいになります。自分の恩着せがましさは棚に上げて、「人の好意をなんと思ってるんだろう？」と相手に対して不信感をつのらせます。「小さな親切、大きなお世話」ということもあるのに……。

「してもらう」ことは、自分が相手に「ありがとう」を言うことです。ミッシェル・クオストというフランスの神父さんの「イエスが新聞を読まれたら」という本(日本基督教団出版局、一九七四年七月五日、初版)の中で、こんなことを言っています。(五〇頁～五一頁)

奉仕をしすぎる！

(前略)

たえず他人の助けを必要とすることは屈辱的だし、他人が自分を必要としていることを知るのには喜ばしいことだ。わたしたちはあまりにもしばしば友だちを自分より下に置こうとするのでなからうか。彼らが時には怠惰とか無意識でこれに甘んじていたとしても、彼らがそこから成長する可能性をも同時に与えるのでなければ、わたしたちには、彼らをその状態にとどめておく権利はない。

持てる者となって持たざる者を「憐れむ」のではなく、同じレベルに立って共にわかち合う者となるべきである。

いつも人びとが必要とする人になつてはならないだけでなく、時には他人を必要とする人にも

ならなければならない。

たえず与える人ではなく、他の人びとを「与えること」に導く人でなければならない。

我々日本人に共通の価値観、「人に迷惑をかけない」ということは、一見、正しいように見えますが、実は、たいへん差別的な発想でもあります。「迷惑」をかけざるをえないお年寄りや、子ども、病人、障害者の存在を忘れていたからです。このような価値観がまかり通っているから、これらの人びとは肩身をせまくして生きざるをえなくしているのです。

「老化」は、なるべく避けたいことと人々が思うのも、「迷惑」をかけることになるからです。でもイエスの示された愛から見れば、「老化」は「感謝」であり、「祝福」なのです。「してあげること」が減って、「してもらうこと」が増える、というのは、それだけ「ありがとう」を言うチャンスが増える、ということでおあります。素直に、してもらったことに「ありがとう」を言うのです。

少し前になりますが、百四歳で亡くなられた婦人がいました。とても元気な方だったのですが、やはり亡くなられる何年か前からは入浴介護サービスを受けられるようになっていました。亡くなられた時、家族の方が市役所に連絡を入れました。すると受話器を取った職員が電話口で絶句された、というのです。家族の方は、そのことでたいへん感激されたのですが、よく話を聞いてみると、その絶句のわけがわかりました。

そのおばあちゃんは、入浴介護サービスをとても楽しみにしておられました。だから、そのチームがやって来ると、

「やあ、来た、来た、待ってたよ。」

とにこやかに、チームを迎え入れるのです。決して、「すみませんねえ。ご迷惑をおかけします」なんて言われなかった。入浴の最中も「あー、いい気持ちだねえ」と素直に言い、ときどきはジョークも飛ばします。だから、チームの人々は、このおばあちゃんのところへ行くのを楽しみにしていたのです。あんまり恐縮されるとかえって疲れるものです。

神様は、人生、「ありがとう」で始まって、「ありがとう」で終われ、とおっしゃっているのではないのでしょうか？だから、「老化」は「祝福」なのです。

イエスのザアカイを改心させた一言の重みのもうひとつの面があります。私ならザアカイと同時に、周囲の人々のことも考えてしまうのですが、イエスは、ザアカイが木に登った瞬間、つまりハプニングなのですが、周囲の人々は視野から消えてしまいました。イエスのザアカイへの一言の重みは、エリコ中の人々の重みでもありました。

ルカによる福音書だけにあるたとえ話に一五章の「見失った羊」のたとえと「無くした銀貨」のたとえと、「放蕩息子」のたとえがあります。それぞれ失われた一匹の羊、一枚の銀貨、一人の弟息子のために九九匹の羊、九枚の銀貨、一人の兄を残します。それは、残したものはどうでもいい、ということではありませんでした。捜すためには、残さざるをえなかったのです。それが、あっとえ「放蕩息子」であっても、エリコの「罪人」であっても。

「失われたものを捜して救う」(一〇節) 愛は、それほどの重みを持っています。この迫力の前

にさすがのザアカイの頑なに閉ざした心も一挙に開かれるのです。

「自分を捨てる」ということは、一人のために、「残りの人全部を捨てる」ことでもあります。これは考えては実行出来ません。だから、「愛は感じたまま」、「愛は考えない」のです。それが相手に喜ばれたなら、イエスと同じように、「今日、救いがこの家に訪れた」（九節）と素直に「よかったねえ」と喜ばばいいし、反対に気に入られなかったら、素直に「ごめんなさい」と言えればいいのです。まったく相手のせいにすることはありません。

場合によっては、溺れる人を助けようとして、自分が命を落とすかも知れない。こんなことを「考えて」いたら、飛び込むのを躊躇するでしょう。でも、実際に飛び込む人は、その時には、どうしようかと「考えて」いたのではなく、たいへんだと「感じて」、体が先に飛び込んでしまう。まわりのことなど「考えて」はいません。「自分を捨てる」ということは、命を捨てるということでもあります。

有名な「愛の賛歌」と呼ばれるコリントの信徒への手紙一の一三章四節から七節にこう書かれています。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

ここで言われている「愛」は、行いではなく、在り方を示しています。あるいは人格と言ってもいいでしょうか。この「愛」というところに、「神」という字を当てはめてみれば分かります。何かの番組で見たのですが、

Love is not doing, but being. (愛はしてあげるのではなく、そばにいること)と出ていました。いい言葉です。神の愛は、まさにそうです。この愛こそが人生の究極の目標だと思います。仕事も遊びもすべてがこの目標に向かうための手段に過ぎません。成功も失敗も健康も病気もすべて愛の完成のための手段となります。

私の存在そのものが愛となって、金太郎飴のように体のどこを切っても愛が出てくる、笑っても、怒っても、泣いても、沈黙しても愛が伝わる、そのようになりたいものです。それは決して、努力の結果得られるものではなく、詩編の作者のように天地創造の神様から造っていただくものです。

神よ、わたしの内に清い心を創造し

新しく確かな霊を授けてください。(詩編五一編一二節)